

令和 3 年 6 月 7 日現在

機関番号：15201

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2020

課題番号：18K12398

研究課題名（和文）運用実態にもとづいた山陰方言におけるノダ文の記述的研究

研究課題名（英文）Descriptive Study of Noda in San'in Dialects: Based on discourse

研究代表者

野間 純平（NOMA, Jumpei）

島根大学・学術研究院人文社会科学系・講師

研究者番号：30780986

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：山陰方言における「ノダ文」（標準語の「～んだ」「～んです」に相当する表現）がどのような機能を持つかを明らかにするため、談話文字化資料を作成した。この談話資料や、他方言を含めた方言コーパスを用いて、当該方言におけるノダ文がどのような場面で使用されているかを分析した。その結果、形の上で「ノダ」に相当する形式であっても、談話における使われ方や機能が異なることがわかった。特に、島根県の出雲方言は、「用言+ダ」をそのまま標準語の「ノダ」に置き換えるだけでは記述できず、同様の傾向は疑問文や命令文とも関係することが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究が取り上げた方言のモダリティ形式は、当該方言の母語話者である研究者による内省を用いなければ記述が難しいということから、記述方言学においては中心的に取り上げられることが少ない項目である。そのような状況において、できるだけ母語話者の内省に頼らない形での研究方法を模索し、それをある程度提示できたのではないかと考えられる。本研究の成果は、消滅危機方言の記述にも役立てることができると考えられる。それによって、方言の話者にとって関心の高い「気持ち」の部分を表すモダリティ形式を記述するのに貢献すると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is to describe the function of 'noda' expression (sentences nominalized by nominalizer 'no') in San'in dialects, based on the discourse data. By using the discourse data and corpus of Japanese dialects, this study shows that 'noda' expressions of each dialects have each function. Especially Izumo dialect, which is spoken in eastern area of Shimane prefecture, have the different function of 'noda' expression (predicate followed by 'da') from standard Japanese and other dialects. And it seems that in interrogative and imperative sentences this function of 'noda' can be described.

研究分野：日本語学

キーワード：山陰方言 ノダ文 モダリティ

1. 研究開始当初の背景

現代標準日本語には、「どこに行くの?」や「用事があるんです」のような、ノダ文と呼ばれる表現がある。これらの例の下線部は、形式名詞の「の」にコピュラ(断定の助動詞、繫辞動詞)の「だ(です)」が組み合わさったものだが、主に文末において様々な意味を表すモダリティ形式である。その意味・機能については、これまでに様々な研究が行われてきた。特に、「ノダの本質的な意味とは何か」をめぐって、「背後の事情」「関連性」「聞き手から見た解釈」など、様々な論考が積み重ねられてきた。方言にもノダ文に相当する表現が存在し、標準語のノダ文研究の成果を援用した研究が行われてきた。

しかし、ここで明らかにされているノダ文の「機能」は、ノダ文を把握するには不十分だと考えられる。例えば、田野村忠温(1990)『現代日本語の文法 「のだ」の意味と用法』では、ノダが「背後の事情」を表すとされている。「今日は休みます。体調が悪いんです」という例では、「今日は休みます」を説明する「事情」として、「体調が悪い」が表現されているという。この説明には確かに妥当性があり、同様の分析を行う先行研究もある。しかし、ノダが「背後の事情」を表すとしても、実際の運用において、「背後の事情」を表す際にいつでもノダが使用されるわけではない。休む理由を「体調が悪いので」のように接続助詞を使って表現することもある。では、ノダ文が使用されるときと使用されないときとは、どのような違いがあるのだろうか。

このような問題は、実際の運用に関わる問題として、主に「意味論的な意味」を議論する文法論の中では論じられないのが普通である。文法記述としてノダ文の研究を行ってきた申請者もまた同様である。だが、ノダ文が使用されるにあたって、「先行発話」や「文脈」といった語用論的な要素が問題になる以上、抽象的な「意味論的な意味」のみをもってノダの持つ機能が完全に記述されたとは言えないと考えられる。

2. 研究の目的

以上に述べた研究背景のもと、本研究の目的を以下のように設定する。すなわち、本研究の目的とは、山陰方言を対象として、談話におけるノダ文の使用実態を運用レベルで把握し、そこからノダ文の機能や使用傾向を明らかにすることである。

山陰方言を対象とする理由の1つは、山陰方言の地域差を、ノダ文の運用という面から明らかにできるのではないかと考えているからである。鳥取・島根二県にわたる山陰地方の方言においては、周囲の西日本方言と異なり、コピュラは「ダ」を用い、標準語の「ノ」に当たる準体助動詞がないことが知られている(標準語の「行くノダ」に当たる形は「行くダ」のように表される)。一方で、山陰内部における方言差もまた顕著で、島根県出雲・隠岐地方と鳥取県西伯耆地方を含む「雲伯方言」は、周囲の中国方言とは様々な点で異なった特徴を持っている。ノダ文に関して言うと、出雲方言においては、上で述べた「命令のノダ」が「ハヤ オキーダワ」のように頻繁に使用されるが、石見(島根県東部)や東伯耆(鳥取県中部)、因幡(鳥取県東部)ではそれが確認されていない。すなわち、山陰方言においては同じ「用言+ダ」という形で表されるが、その運用のあり方に方言差があるということである。この点に注目して、本研究の主な対象を山陰方言とした。

3. 研究の方法

本研究の特徴は、談話データを用いて、モダリティ形式の意味・機能を明らかにしようとするという点にある。終助詞やノダ文といった方言のモダリティ形式の意味記述においては、一般の方言話者を対象とした面接調査(エリシテーション)を行うことが難しく、当該方言の母語話者である研究者自身が、内省によって記述を行うことが多い。それに対して本研究は、面接調査では限界があるところを、大量の談話データによって補おうとする研究である。本研究で用いた談話データは、方言話者による自然会話と、面接調査のインタビューデータである。これらの談話データから、ノダ文が使用されている例を抽出し、共起する形式や発話内容、発話状況などを観察し、様々な観点から分析した。例えば、「聞き手の知らないことを伝えるとき」にノダ文が使用されるということが多くの先行研究で指摘されているが、具体的にどのような内容を伝える際にノダ文が使用されていて、その際にどのような終助詞が共起するのかといったことを用例ごとに整理する。また、ノダ文が使用されていない用例も取り上げ、同様の場面においてノダ文が使用されるか否かの基準がどこにあるのか、共起する形式や発話場面など、様々なレベルから考察した。

また、ノダ文に関する文法項目の面接調査も並行して行った。談話データのみを用いた場合、「こういう言い方はできない」といった否定証拠が得られず、データの網羅性の点で問題があると考えたためである。

4. 研究成果

本研究開始当初は、「用事があるんです」のような平叙文の文末において用いられるノダ形式を主たる対象とし、運用実態をもとにその機能を明らかにすることを考えていた。しかし、談話データに現れる個々の用例には、無数の文脈情報が存在し、ある程度の補助線がなければ分析が困難になることが判明した。

そこで、山陰方言のみで分析するのではなく、標準語も含めた他方言と対照させながら分析する方法をとった。研究開始当初は、他方言とはできるだけ独立した形で山陰方言のノダ文を記述しようという考えがあったが、それを改めることになった。

他方言のデータには、既存の談話資料を用いた。特に、国立国語研究所の「日本語諸方言コーパス (COJADS)」を主要なデータとして用いた。そして、形式上ノダ相当形式と判断される形式が、コーパスにおいてどのように訳されているかを用例ごとに集計し、そこに方言差があることが示唆された。

既に述べたように、山陰方言においては、「ノダ」の「ノ」に相当する形式がなく、用言に「ダ」が直接つく。同様の形は、中部地方の愛知県、静岡県、山梨県などの方言にも存在するが、コーパスをもとに分析した結果、標準語の「ノダ」とこれらの方言の「用言+ダ」の対応関係には方言差があることが示唆された。特に原因・理由を表す「カラ」相当の従属節内において顕著で、標準語における「から」と「のだから」の意味的な対立が明確な方言と、そうでない方言に分かれる。山梨・静岡方言は前者、愛知と山陰方言は後者に分類できる。

他にも、「ノダ」に相当する形式が標準語の「ノダ」とは意味的に対応せず、別の終助詞のような機能を持っていることも判明した。出雲方言の「ダ」や高知方言の「ガ」がこれに当てはまり、特に高知方言の「ガ」は、確認要求に関わる終助詞「ガ」や接続助詞の「ガ」との区別が困難な場合が少なくなく、これは「ガ」の多機能化の動機となっているのではないかと考えられる。

くわえて、出雲方言の疑問文において用いられるノダ相当形式について重点的に面接調査を行った。既存の方言コーパスや研究代表者が所持している談話データには疑問文が現れにくく、あまりデータを得られないというのが主な理由である。また、出雲方言の疑問文における「用言+ダ」の中には、標準語の「ノダ」に置き換えられないものも存在し、その機能が独自のものである可能性がある。

出雲方言の疑問文における「ダ」は、標準語の「ノダ」よりも「既定の事態」「当為性」を強く表すことが明らかになった。特に、以下の(1)のように話し手が主語の場合に用いられやすい。

(1) A: 残ったごはん、全部食べちゃって。

B: おれが食うダ?

(1)におけるBの発話は、相手に「全部食べちゃって」と言われたのに対して「おれが食うのか」と問うているものである。この「ダ」は標準語では「の(か)」に置き換えることができる。しかし、次のような場合、出雲方言の「ダ」を使うことはできない(以下の#は、当該発話がその文脈において不適切であることを表す)。

(2) A: この前、たまたまC君に会ったよ。

B: #へー、C君って今なにしてるダ?

(2)では、AとBの共通の知り合いであるC君に会ったとAが言ったのに対して、Bが「C君は今なにをしているの」と尋ねたものである。標準語では、「何してるの?」とノダ文で言うことができるが、このような場合、出雲方言では「ダ」を使うことができない。

以上のことは、出雲方言の疑問文における「ダ」が標準語の「の(だ)」と意味のうえで一致するものではなく、「の(だ)」にはない意味を「ダ」が表していることを意味すると考えられる。具体的には、「ダ」が「の(だ)」よりも「義務」や「当為性」を強く表し、「受け入れがたさの表明」において用いられやすいことが明らかになった。

以上のように、本研究では、各地方言における「ノダ相当形式」が意味・機能のうえでどのような共通点・相違点を持っているのかを、談話データからアプローチしてきた。研究手法やその妥当性にはまだ検討の余地があるというのが正直なところだが、方言モダリティの研究に対する一定の貢献を果たしたと考えている。本研究が取り上げた方言のモダリティ形式は、当該方言の母語話者である研究者による内省を用いなければ記述が難しいということから、記述方言学においては中心的に取り上げられることが少ない項目である。そのような状況において、できるだけ母語話者の内省に頼らない形での研究方法を模索し、それをある程度提示できたのではないかと考えられる。本研究課題で得られた成果の中には、新型コロナウイルスの影響で調査が遅れていることなどにより、まだ発表できていないものもあるため、現在その作業を急いでいるところである。本研究課題の次の課題として、「ノダ文」だけでなく、終助詞類や述語のみで文が終わるような用例も含めた分析が必要であり、分析方法もより洗練させていく必要があると考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 野間純平 | 4. 巻 16 |
| 2. 論文標題 大阪方言の平叙文における「ネンナ」「ネン」に固有の意味特徴 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 阪大社会言語学研究ノート | 6. 最初と最後の頁 35-54 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/73638 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|--|--------------------|
| 1. 著者名 野間純平 | 4. 巻 37 |
| 2. 論文標題 2019年度島根大学隠岐方言調査 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 隠岐の文化財 | 6. 最初と最後の頁 1-10 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 白岩広行・門屋飛央・野間純平・松丸真大 | 4. 巻 - |
| 2. 論文標題 甌島里方言のモダリティ表現 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 鹿児島県甌島方言からみる文法の諸相 | 6. 最初と最後の頁 121-155 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 野間純平 | 4. 巻 - |
| 2. 論文標題 甌島里方言のノダ相当形式にみられる音変化 他方言と対照して | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 鹿児島県甌島方言からみる文法の諸相 | 6. 最初と最後の頁 249-271 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 野間純平 | 4. 巻 36 |
| 2. 論文標題 2018年度島根大学隠岐方言調査 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 隠岐の文化財 | 6. 最初と最後の頁 20-29 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

| |
|-------------------------|
| 1. 発表者名 野間純平 |
| 2. 発表標題 方言におけるノダ文の機能 |
| 3. 学会等名 日本語文法学会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 野間純平 |
| 2. 発表標題 「日本語諸方言コーパス」を用いたノダ文の方言間対照 |
| 3. 学会等名 国立国語研究所シンポジウム「日本語文法研究のフロンティアー日本の言語・方言の対照研究を中心にー」 |
| 4. 発表年 2021年 |

〔図書〕 計2件

| | |
|------------------|---------------------------|
| 1. 著者名 木部 暢子 | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 三省堂 | 5. 総ページ数 192 (分担執筆3項目) |
| 3. 書名 明解方言学辞典 | |

| | |
|-----------------------|----------------------------|
| 1. 著者名 森山 卓郎、渋谷 勝己 | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 三省堂 | 5. 総ページ数 208 (分担執筆10項目) |
| 3. 書名 明解日本語学辞典 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|